

コマツナの多角的な生産安定化技術の開発

【研究概要】

コマツナ生産現場では、高温期に発生する芯枯れ症状や葉の黄化症状等、未知の生育障害が増加傾向にあり、それらの原因究明が急務となっている。一方、出荷サイズが大型化しており（以下、大株出荷）、春先収穫での抽苔抑制や、最適な施肥・灌水方法などの栽培管理技術の確立が求められている。そこで、各種生育障害発生の原因解明及び応急対策、春先収穫の在圃性確保、及び大株出荷に適した栽培管理方法など、コマツナの多角的な生産安定化技術を開発することを目的に試験を実施した。その中で今年度は下記の成果が得られた。

- (1) 夏期の多灌水は、生育促進効果はあるが、芯枯れ症状の発生抑制効果は乏しいことがわかった。また、芯枯れ症状は生育が進むにつれて発生しやすくなるが、生育中期までは土壌が乾燥していてもほとんど発生しなかった。
- (2) 株間12cmでは株間6cm、9cmより早期に草丈が40cmに達し、株重も大きくなるが、単位面積当たりの収量は少なくなる。しかし、生育が進むほど収量比は小さくなり、草丈40cmでは株間12cmの収量が6cmの85%前後となる。また、100kg収穫時の収穫時間は株間12cmで株間6cmの半分程度となった。